Creating our Happy Life. 自らの文化を語り合い、創り、学び合う。
― Internet network を通した文化の対話による
日本語教育の可能性をさぐる ―

巖佐　葵（在マハサラカム）

Creating our Happy Life. Talk, create, and learning together.
-Potentiality of Japanese language Education with dialogue between Cultures though internet.-

Aoi IWASA, Mahasarakham

要旨：現在、日本語教育の分野では増加しつづける国外学習者のための教育体制の整備が期待される（文化庁文化部国語科 2021、2014）。海外でも特に日本の文化にふれる機会がインターネット網を経由した情報に限られる地域において日本語教育実践にはどのような可能性があるか。本発表は対面から ICT 導入へと移行した時期の３つの教育実践:（１．日本を拠点とする作家達と学習者の対話、２．ご当地キャラクターの紹介、３．自民俗誌記述による作文実践）について、その ICT 活用に焦点を絞る。不自由なコロナ禍の下、ICT を活用し実現したある意味自由かつ伸びしろを感じた日本語教育を報告し、海外の ICT 活用の可能性と今後にむけた課題を整理する。

キーワード：情報網上における自文化の表現、文化間の対話による言語能力の育成

1. はじめに

本研究は、ソーシャルメディアや Internet 網を活用した日本語教育の実践について、東南アジアの教育現場からみえた課題と可能性を述べ、今後の日本語教育支援システム開発に資することを目的とする。

学習実践の教育機関は、タイ東北部コラート台地の中央に位置する。周囲は稲作地帯の平原が広がる。水はけが悪く、しばしば洪水も発生する。雨の日には決まって大きな水溜まりが通りをふさぎ、町は停電に見舞われる。他方で各地から日本語を学びに学習者が集まる教室や構内の Internet 設備環境はサポート体制を含め学習環境整備への努力がなされている。建物の周辺には日本のコンビニが進出し、町には日本企業の食品、人気のキャラクター商品、日本をイメージした商品も並ぶ。ある学習者はコロナ禍以降、ほとんどすべての買い物をオンラインで済ませる生活で、買い物の支払いもスマートフォンで行っており、Internet は手放せないと語っていた。新聞などの購入は町では難しく、これまでに担当した科目の受講生を対象とした調査からは大勢の学生や地元の人は日本に興味を持ちながら端末の画面越しに internet を通して日本を眺めている状況がうかがわれる。ただ、学習者の期待する日本以外にも日本にはもっとさまざまな魅力的があり、日本全国に様々な

場所があり、いくつもの季節、いろいろな世代がいる。文化のおもしろさを一緒に考え、言語を学ぶ楽しみを模索したいと思い企画した。本発表は、感染状況のためにICT導入に移行した後の取り組みの実践報告である。

多くの言語教育は整った学習環境を想定されて議論されている。しかし、Onlineでの学習支援を考えるとき、これまでと同様に学習者がカプセルの中にいるような空間をイメージしてよいのか。どのような問題と可能性があるか。実践から考えたい。

2. 実践とその方法

ICTの利用について2019年9月28日から2021年4月30日までのタイのイサーン地方における日本語教育現場から実践報告をする。

2.1 【実践①】日本を拠点とする作家達と学習者の対話

本節では、日本とタイの交際交流展において、タイの学習者達とコロナ禍によって渡航できなかった日本の作家らとの対話や創作のイベント開催時におけるICT活用について述べる。作品展についてはここでは扱わず、ICT の利用に話題を絞る。トークイベントでは日本の言葉や文化に関心をもつ学習者らを含む鑑賞者との対話の機会をもつことができた。

2.2 【実践②】ご当地キャラクターとその地域の魅力の紹介

本節では、ICTを活用し自ら収集、整理、分析した情報を日本語で動画にまとめ紹介した取り組みについてである。上級学習者は現代日本社会について述べるとともに、日本/タイ/自分で創作したオリジナルのうち一つ選択し、お気に入りのご当地キャラクターからたどり各地の特徴や魅力を日本語で紹介した。学期中に学習者らが選び扱ってきた日本社会のトピック（その土地の基本情報から食やその旬の季節まで12項目）を日本語にまとめ動画で紹介した。会話学習者は日本タイ双方のご当地キャラクターを紹介した。

2.3 【実践③】作文実践『わたしたちの村、イサーン』

本節では、作文教材の学習項目と歩調をあわせつつ、『わたしたちの村、イサーン』という学習者らが自分たちの暮らしの民俗誌を記述する初級作文実践について述べる。

3. ICT利用の結果および考察

3.1 できたこと

画面越しの日本の情報にアクセスが限定される地で、直接、文化を鑑賞し、さらに作家との対話の機会を設けることができたことは、一度、誰かによって編集された情報ではなく、自分自身で文化にふれることができる貴重な機会といえる。文化の当事者同士が語り合う時間がICTによって実現した。また、会場では共同創作も行った。

また、県境や国境をこえ村、ラオス・日本の作家、地元の市民などをICTによって各地からタイの会場へ招待したいという当初の構想はICTを通してわずかに実現できた。

対面学習による問題の多くは、Onlineで解決された点も多い。PPT画像ははっきりと学生に届くようになり、チャット欄に気軽にメッセージをかくこともできる。

学生たちはカラシンなど地元のキャラクターを紹介し、自発的に地元の文化村のページなどを紹介してくれたり、身近な人から聞き書きを行う作文では、村に住む叔母のインタビュー動画を送ってくれた学生もいた。ICT の活用が促進した取り組みといえる。

3.2　ＩＣＴ利用の課題

本節では、言語教育の課題を整理する。対面と Online 学習移行期について言語学習の様子を比較した。言語能力の育成においてはリアルタイムのコミュニケーションは必要と考え、オンデマンド形式ではない google classroom による Online 学習を採用した。教師側からみて変わったのは、コミュニケーションと理解の評価である。まず、Classroom 内のコミュニケーションが教師－発言中の１名の言語的要素のみに限定されることとなった。発話者以外マイクをミュートにする必要性の他、現地の学習者の画面をオフにする習慣により、対面授業において学習者の理解を測る手がかりとしていた非言語的要素などがすべて遮断される。その点で、学習者に対してのフィードバックも対面教室の方がスムーズであり、内容理解、そもそも聞こえているかの確認に多くのエネルギーが費やされた。

さらに、理解をささえていた学習者間の相互扶助の機会の変化について述べる。直接法による日本語指導において、学習者間では教室で指名した時などにしばしば現地語によってリアルタイムで助け合う様子が日常的に見られた。ICT 導入後は classroom 内でその機会は自然には得られなくなった。その後、在宅学習の初期には学習者達がそれぞれの画面には一人ずつ映りながら、集まる様子が見られたり、後には Classroom 画面とは別に messenger などの別の SNS を併用するなど対面教室のタブーは「新しい常識」としてかたちを変え維持される様子が見られた。

当初は個別の言語能力の育成という観点から評価すると一人一人の能力向上につながらないのではないかと懸念し、助け合わなくてもよい授業を提供できるように努めた。しかし、東南アジア大陸の農村が広がるこの辺りは、エンブリーやドンデーン村の調査により「緩やかな構造」のもとの二者関係の集合的累積体として人間関係や社会構造が議論されてきた地域である（Embree1950, 水野 1975, etc.）。このような学習者の様子も文化的に発達した持ち味として活かす授業内容を考えるべきかもしれないと思い至り、学生同士のワークのかたちを工夫するなどの試行錯誤を続けた。現地の社会文化的な理解の上に、さまざまな言語教育をデザインすることで学習者にとって必要な能力を効果的効率的に養成できる可能性についての検討は今後の課題としたい。

つぎに、自然的条件にかかわる問題についてである。国外の言語教育における ICT 利用をコロナ禍初期の Online 学習の実践現場から考えるとき、気候や風土などは度外視できない課題であった。前述のように設備に恵まれた空調・通信など完備された学習空間を出ると、校舎の外は熱帯モンスーン気候である。高温の季節には報告者の PC も熱のために故障し購入せざるを得ず、降雨量の多い時期は停電などの課題もある。大雨が降ると洪水で出席できない学生が多いことを理由に休講となることも驚かれない土地柄である。PC のあらゆる隙間から虫が次々と出てくるようになり、AC アダプターが故障するという事

態が発生したことなど具体的な事例から、これまで想定されてきたような環境が整備された学習空間だけではないことを考慮する必要性を指摘する。

４． おわりに

本発表は、海外での日本語教育について ICT を利用した実践の報告である。国内を想定すると論点とされないことがこの地域の ICT 教育現場では実践の質にもひびく切実な課題となることがわかった。海外の ICT 言語学習を考えるときには、ハード面、ソフト面、指導体制に加え、さらに考慮すべきことがあるといえる。

以上の結果から、学習者のおかれた社会文化的環境や気候や風土などの自然環境への理解を深め、学習対象者にとって充実した学習デザインを考えたい。

いずれにしても、本発表は同じ地球上で暮らす仲間として楽しく学びお互いの理解を深めるために ICT 利用の可能性を感じた実践である。発表者が不慣れな上、試行錯誤の中で取り入れた ICT であったため、実践は完成形には遠く、発表者自身も発展の可能性を秘めていると感じるものである。今後は、以上に述べた論点を中心にしっかりと言語能力をのばすことができる、たのしくより効果的な学習へ発展させていきたい。

謝辞

本研究は 2021 年 4 月 30 日まで在籍したタイ国立マハサラカム大学人文社会学部タイ東洋言語学科日本語学での学習実践に基づく。マハサラカム大学の学習者や先生方およびお世話になった日本とタイの皆さまにお礼を申し上げたい。

参考文献

「日本語教育の推進に向けた基本的な考え方と論点の整理について」（平成 25 年 2 月 18 日、文化審議会国語分科会日本語教育小委員会課題整理に関するワーキンググループ）報告 URLhttps://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/shingi_matome/ 令和 3 年 6 月 24 日確認

文化庁文化部国語科（URL https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/suishin_gaiyo_130801.pdf 令和 3 年 6 月 24 日確認）

Embree, John F. 1950."Thailand – a Loosely Structured Social System," *American Anthropologist*, Vol.52, No.2.

水野浩一. 1975.「稲作農村の社会組織」, 石井米雄 (編) 『東南アジア研究叢書タイ国』46–82. 東京:創文社.